三中だより

令和５年度　５月号

令和５年５月１５日発行
荒川区立第三中学校
（学校通信　Ｎｏ．３）

校長　　小　柴　憲　一

「優しい人」になってほしい

保護者の皆様は、お子さんが誕生して子育てをしていくうちに、「元気な子に育ってほしい」など様々な願いをもったことと思います。そのような願いの中で「優しい子になってほしい」と思われた保護者の方もいらっしゃるかと思います。

校長という仕事をしていると、いずれの中学校にいても、受験期前に3年生対象に面接指導をすることが多くあります。ちなみに本校では、過去3年間続けてきました。面接をしていると、「優しい人だな」と感じる子どもがいます。面接では、「志望動機」や「高等学校に入学して頑張りたいこと」だけを聞くのではなく、様々な場面を提示して「あなたならどうしますか」という設問をすることにより、受験者の人柄や本校への適性も見るのです。ですから、その回答によっては「優しい人だな」と感じることができるのです。

私は、そのような子どもに遭遇するたびに、自分自身の子育てを振り返って反省することがあるとともに、「この子の親御さんはどのような子育てをされたんだろう」と思いをはせることもあります。

「優しい人」というのは漠然としていますが、今回は、面接指導を通して感じた、具体的な行動をお示しし、「私が感じる優しい人」について紹介します。

1　人を肯定的に見ることができる人

他者の弱点や欠点に着目し、そのことを指摘する話をする子どもたちがいます。見ていてあまりいい印象はもてません。ご家庭でも、お友達のことを含め学校でのできごとの愚痴をたくさん言うお子さんがいるのではないでしょうか。

しかし「優しい人」は他者を肯定的に見るのが習慣づいているのです。弱点や欠点は当然感じているでしょうし、それにより不利益を受けたこともあるでしょうが、それでも「・・・こんなことをされたこともあるけど、こんなことができる人なんだよ」と、必ず強みや長所にも着目することができるのです。先のような弱点や欠点ばかりの話をしている友達の中にいて、そのような発言をするのは勇気がいるかもしれませんが、「優しい人」はそれを自然とすることができるのです。

2　人を許す心がある人

クラスの中で失敗をしてみんなに迷惑をかけてしまったり、部活動の中で理不尽な対応をされてしまったりすることが、学校だからこそ時としてあります。

そのようなとき、失敗した人を責めてしまったり、理不尽な対応をする人とトラブルになったり対立関係になったりすることもあります。

しかし、「優しい人」は「・・・だったから失敗したんだよね」とか「私が気に障ることをしたんだったら謝るよ」「これからも私はあなたを仲間だと思っているよ」と相手を許す気持ちが先に立った対応をします。

ですから「優しい人」の周囲では、友人関係のトラブルは起こりにくいのです。

3　困っている人を自然と助けることができる人

中学生になれば、困っている人がいれば手助けをすることはします。視覚障がいのある方が横断歩道を渡っているときに「何かできることはありますか」と働きかけたり、公共機関でご高

齢の方に座席を譲ってあげたりなど、目に見えて困っていることが分かる人に対する対応はできることでしょう。

しかし、「優しい人」はそれ以上に、認知に偏りがあったり、発達障がいのある友達で、机の上が散乱しているときに整理整頓を一緒にしてあげたり、授業中に教員の指示理解ができなかったときに「・・・をするんだよ」と教えてあげたりなど、一見では分かりにくい他者の困り感にも気付いて自然と助けることができるのです。

4　気分や相手によって態度を変えない人

人には何かのできごとで気持ちが高ぶったり落ち込んだり、あるいはいらいらしたりなど気分は変化するものです。また、趣味や好みが同じで話しやすい人がいると思えば、その逆で話しにくい人がいてもおかしくありません。

多くの人は、そのときの気分でそのこととは全く関係ない人に冷たく当たってしまったり、話しにくい人とは同じ班になりたがらなかったり、ひどい場合は排除する行動を取ったりする人もいます。

しかし「優しい人」は気分がどうであれ、その因果関係とは全く関係のない相手に対して態度は変えません。また、話しやすい人に対しても話しにくい人に対しても公平に接することができます。この根幹には、自分の気分や相手の特徴に関わらず、人を尊重するという精神があるのです。

5　人の幸せを素直に喜ぶことのできる人

人には他者の幸せをねたんでしまう傾向があります。特に、自分が置かれた境遇が厳しいときほど、ある人が喜んでいるとその傾向が強くなり態度に出てしまうこともあります。

しかし「優しい人」は、自分のことは置いておいて、誰かに良いことがあったり、誰かが喜んでいたりするときに、「よかったね」と自分事のように素直に一緒に喜ぶことができるのです。ですから、そのような人のまわりには人が集まってくるのです。

6　自分の判断で行動できる人

近くの友達がある友達の悪口で盛り上がっているときに「あの子はそれだけじゃないよ。こんな所もあるよ」と水を差すような発言をすること、自分に対して理不尽な対応をした人に対して「これからも私はあなたを仲間だと思っているよ」と言うこと、見た目では一瞬分からない困り感をもっている認知の偏りがあったり発達障がいのある友達に対して支援をしてあげること、自分の気分が落ち込んでいたりしても相手に対してはそのような側面は見せずに対応すること、自分の置かれた境遇は厳しくても他者の喜びを自分事のように素直に喜ぶことなど、これまでの具体的な行動は、時に勇気が必要であったり、時に自分の感情を抑えたりすることが必要な場合があります。

しかし「優しい人」は、その場の雰囲気に流されたりせず、自分の感情もコントロールして、自分の判断で行動できるのです。したがって、同調圧力にも流されない強い芯をもっているとも言えます。

7　見返りを求めない人

「優しい人」は誰かに親切にしたり、誰かを助けたりしたからといって、決して見返りを求めてはいません。もちろん「ありがとう」と言ってもらいたいなど、感謝されることも求めてはいません。なぜなら、そうすることが当たり前だと思っている人たちだからなのです。

「優しい人」には下心はありません。

これら一連の行動は、1・2年生では難しいかもしれません。3年生になり、楽しい経験も苦い経験もしてきたからこそ、人格が洗練されてできるようになるのです。

それでは、ご家庭では何ができるのでしょうか。

保護者の方々自身が、これらの行動を取っているところをお子さんに見せるのです。人を肯定的に見た会話ばかりを家の中でしたり、どんなに忙しくてもそれを理由に態度を変えたりしなかったり、近所の人の幸せを自分事のように大げさに喜んだりするのです。

思春期にある子どもたちは、大人の言動に敏感で、それらにより子どもたちの価値観、すなわち「どうすることがいいことなのか」という基準が確立されていくのです。お子さんによっては「どうしてお隣さんのことなのにそんなに喜ぶの？」と聞いてくることもあるかもしれません。そうしたら「だって、良いことがあったんだからうれしいことじゃない」と返してあげればいいのです。

7点ほど、具体的な行動例を挙げましたが、これが私が感じる「優しい人」です。人それぞれ、どういう人を優しいと感じるかは異なるかと思いますが、はっきりと言えることは、「こういう人になってほしい」と思ったら、そういう人が取る具体的な行動例を考え、保護者の方自身がそのような行動を取り子どもたちの価値観を揺さぶっていくことです。

各保護者の方々でお考えいただいてみたらいかがでしょうか。

いじめ問題に対して学校は教育として対応します

「いじめ」は、どの学校でも誰にでも起こり得るという認識をもっています。さらに、だれでもいじめ行為をしてしまう側にもされる側にもなる可能性があります。そこで、本校では学校経営方針に、いじめ問題への対応として以下のように記述しています。

> いじめの未然防止を図ることはもちろんのこと、早期発見に努める。特に、特徴的な言動をしてしまう生徒は周囲の生徒から理解されにくいことが多い[1]ことから、早めに当該の保護者との面談を通して、周囲の生徒への理解を促す方法について相談する。また、いじめに発展する可能性を教員が察知したときは、すでにいじめに進展している場合が多い[2]ことも念頭において、速やかに学校いじめ防止対策委員会に報告し対応をする。その際、今起きているいじめ行為とその前段階にあった原因は分けて考え[3]、まずは、いじめ行為の具体の解明とそれが許されないこと、そしてその原因となっていたことが起きないようにするための手立ての順で考える[4]ようにする。
>
> また、いじめられた生徒の保護者の感情に寄り添うのは当然だが、いじめをしてしまった保護者の心の中にそれを認知したくないという心情がわいてくることを踏まえたうえで[5]、「誰もが被害者にも加害者にもなり得ること」「大切なことはその経験を苦い経験として生徒本人が受け止めてリスタートすることにより、生徒はより一層人格が形成されえていくこと」を伝えていく。

1　特徴的な言動をしてしまう生徒は周囲の生徒から理解されにくいことが多い

子どもの特性によっては、他の子どもたちの雰囲気の流れを妨げる言動をしてしまうことや、他の子どもたちが暗黙のうちに把握している認識とは異なる言動、いわゆる空気を読めない言動をしてしまうことがあります。3年生にもなるとそれらを理解するようになりますが、1年生の段階では、そのことをからかったりしてしまうことがあります。そこで、そのような特性のあるお子さんの保護者とは、事前にその子どもの特性を他の子どもたちに理解してもらう方法についてご相談させていただきます。

2　いじめに発展する可能性を教員が察知したときは、すでにいじめに進展している場合が多い

教員が「ふざけの度を超しているのではないか？」と察知したときというのは、すでに子どもたちの間ではいじめに進展している場合が多いものです。したがって、そのような情報は、すぐに学校いじめ防止対策委員会に報告し対応を開始します。

3　今起きているいじめ行為とその前段階にあった原因は分けて考え

この2つを混在して協議してしまうと、「そういう背景があったからいじめをしたのか」という

結論に帰着してしまうことが多く、まるでいじめ行為をしてしまった側を擁護するような協議になってしまいます。世間でも、社会的な事件が発生したときに、事件の事実と容疑者の生い立ちの苦労などを同時に報道してしまうと、一部の視聴者の間で容疑者に同調する風潮になってしまい、決して許されない事件の事実がないがしろにされていってしまうのと同じことです。

4　まずは、いじめ行為の具体の解明とそれが許されないこと、そしてその原因となっていたことが起きないようにするための手立ての順で考える

いじめ行為を受けた子どもを徹底的に守ることが大原則です。したがって、どのようないじめ行為があったかを解明し、それは決して許されないということを、いじめ行為をしてしまった子どもに毅然と指導します。そして、どうしたらそのような行為が起きなくなるのかについて、いじめ行為をしてしまった側の原因を取り除き課題を解決する指導をします。

5　いじめをしてしまった保護者の心の中にそれを認知したくないという心情がわいてくることを踏まえたうえで

「自分の子どもがいじめ行為をした」ということは、保護者の方からすると認めたくないほどショックなことです。しかし、学校では、いじめ行為をしてしまったことでその子どもの人生が終わりにするのではなく、むしろその経験を生かして、より人格を形成させていくことを考えます。それが教育の役割です。

そのような教育をするためには、いじめ行為をしてしまった子どもも保護者の方もしてしまった事実を受け止めた上で、再スタートする気持ちをもってもらう必要があります。「やったことは悪かったと思いますけど・・・」という考えのうちは、「3」と同じことになってしまいます。保護者の方にとってはつらいことかもしれませんが、背景は学校も理解していますので、してしまった事実に言い訳なしで一度向き合うようにしてください。

いじめ問題が起きたとき、いじめ行為を受けた子どもを徹底的に守り続けること、その保護者の気持ちにより添うことは当然のことですが、いじめ行為をしてしまった子どもを成長させていくことも学校では教育を通して行います。

その教育が誤解を受けて、いじめ行為を受けた子どもの保護者の方から、「学校はいじめをした子どもの味方なのか」というご意見をいただくことがあります。その保護者の方のお気持ちは十分に理解できますが、学校は敵・味方ではなく、どの子どももその子に応じた教育をする機関だということをご理解ください。

●春季強化大会バレーボール女子の部において以下の成績を収めました。
　第3位
●バレーボール女子の部がブロック大会で以下の成績を収めました。
　ベスト4
●「第37回　川の手　あらかわまつり」に、以下の子どもたちがボランティアとして参加しました。
　1年　竹田　優菜、武藤　琉花、作佐部　希咲、湯浅　心吾、駒野　茉樹、佐藤　真希、
　　竹本　理桜、田中　颯人、堀部　仁瑚
　2年　風間　琉聖、佐々木　友花
　3年　安藤　珠希、小杉　律、鈴木　万由華、武田　隆助、増田　紬、石島　太一、大矢　千央、
　　田邉　結月、渡辺　彩恵、渡邉　奏志、牛込　啓悟、惠良　宗佑、岡部　有里、落合　翠、
　　清野　まいあ、武田　純佳、平野　結月、福岡　優太、山木　日楠、山本　さくら、
　　新井　琉南、岩瀬　貴祐、太田　咲良、佐藤　詩音、原田　凛、宮入　瑚武、清水　葵